

## 友人関係場面における目標志向性と 抑うつとの関係に介在するメカニズムの縦断的検討

筑波大学大学院(博)心理学研究科 黒田 祐二

筑波大学心理学系 桜井 茂男

Three mechanisms between goal orientation in peer relationships and depression among preadolescents: A longitudinal study

Yuji Kuroda and Shigeo Sakurai(*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

In the present longitudinal study, we examined three mechanisms between goal orientation in peer relationships and depression. According to proposal by Dykman (1998), we examined a) diathesis-stress model and b) stress-generation model as one of these mechanisms. We also newly proposed and examined c) eustress-generation model, which predicts that goal orientation impacts on generation of positive interpersonal events which in turn effects on depression. Three kinds of goal orientations were investigated : interpersonal experience/growth (the goal of developing oneself by acquiring interpersonal experiences), performance-approach (the goal of obtaining positive personality evaluations in peer relationships) and performance-avoidance (the goal of avoiding negative personality evaluations in peer relationships).The results show the following. First, high interpersonal experience/growth goal leads to low depression through buffering the negative impact of interpersonal stress or generateing eustress. Second, high performance-approach goal leads to low depression through generateing eustress. Finally, high performance-avoidance goal leads to high depression through generateing stress and exaggerating negative impact of the stress or impacting on low interpersonal eustress. The implications of present study for existent researches on mental health are discussed.

**Key words:** goal orientation, peer relationships, depression, diathesis-stress model, stress-generation model, eustress-generation model

### 問題と目的

ここ10数年の間、抑うつに関する心理学的な実証研究が盛んに行われてきた。近年では、青年・成人を対象とした研究のみならず、子どもを対象とした研究も盛んに行われている(黒田・桜井, 2000)。その背景には、子どもにも大人と同様に抑うつが存在し、しかもかなり高い割合で蔓延しているという現状がある(村田, 1993; 高野, 1995; 辻井・幸・

本城, 1990)。このような現状を考えると、大人と同様、子どもの抑うつがどのように発生するかについての体系的な研究が必要であるといえよう。しかしながら、本邦においては、子どもの抑うつ生起のメカニズムを検討した研究があまり行われておらず、検討すべき重要な課題となっている。

抑うつ生起のメカニズムについての心理学的な研究において、これまでいくつかのアプローチが提唱されてきた。個人の認知的要因(例えば、原因帰属

スタイル、自己スキーマ)を抑うつつの原因とみなす認知的アプローチと、行動的要因(例えば、社会的スキル)に焦点をあてる行動的アプローチは、これまでの研究における主要なアプローチであった。

これに対して、近年、「目標志向性」などの動機づけ的な要因から抑うつつの生起を説明することが有効であると指摘されている(Dykman, 1998; 桜井, 1995)。目標志向性とは、生活の様々な場面における「行動の目的」や、そこにおいて「目指していること」であり、「個人の認知・行動・感情を方向付けるもの」である(Dweck, 1996)。本研究においても、Dykman (1998)や桜井 (1995)に従い、目標志向性という観点から、子ども、特に自己意識がかなり発達してきた中学生を対象に、抑うつ生起のメカニズムを検討する。

黒田・桜井 (2001)は、これまで学業場面における目標志向性から抑うつや無力感反応を予測する研究が多く行われているのに比べて、友人関係場面を含む対人関係における目標志向性から抑うつを予測する研究が少ないことを指摘し、これらの関係について検討した。彼らは、友人関係場面における目標志向性として、経験・成長目標(対人経験の獲得を通して自己の成長を目指す目標)、評価-接近目標(性格について良い評価を得ることを目指す目標)、評価-回避目標(性格について悪い評価を避けることを目指す目標)の3つの目標を取り上げ、抑うつとの関係を検討した。その結果、Dweck & Leggett (1988)の仮説通り、経験・成長目標は抑うつと負の関係を示し、評価-回避目標は抑うつと正の関係を示すことが見出されたが、Dweck & Leggett (1988)の仮説に反して、評価-接近目標は抑うつと負の関係にあることが見出された。

しかし、黒田・桜井 (2001)の研究においては、以下のような問題点が考えられた。すなわち、3つの目標がどのようなプロセスを経て抑うつを発生させたり防いだりするかについて検討されていない点である。3つの目標と抑うつとの関係を示すだけでなく、何故上記のような関係が示されたのかを説明することが必要であろう。そこで本研究では、3つの目標がどのようなメカニズムによって抑うつを強めたり弱めたりするのかを検討する。

目標志向性が抑うつに影響を与えるメカニズムについて、Dykman (1998)は2つの仮説を提唱している。まず1つは、「素因ストレスモデル」(diathesis-stress model)である。目標志向性の素因ストレスモデルとは、「何らかのストレスが生じた時に、ある特定の目標志向性(素因)をもっている者は抑うつに陥りやすくなる」という仮説であ

り、抑うつつの予測において素因(目標志向性)とストレスとの交互作用を想定するものである。この素因ストレスモデルの検証として、Dykman (1998)は、自己の価値、有能さ、好ましさを証明しようとする目標(validation-seeking; 証明目標)の高い大学生は、ストレスが生じた時に抑うつに陥りやすくなるという結果と、自己を成長させようとする目標(growth-seeking; 成長目標)が高い大学生は、ストレスが生じて抑うつ状態に陥りにくいという結果を見出している。

もう1つの仮説は、「ストレス誘発モデル」(stress-generation model; Davila, Hammen, Burge, Paley & Daley, 1995; Hammen, 1991)である。この仮説によれば、抑うつ者は、特に対人関係において不適応的なやり方で振舞ってしまうことによって、他者からの拒絶などのストレスを誘発し、自滅的に抑うつを発症ないし悪化させるという(Herzberg, Hammen, Burge, Daley, Davila & Lindberg, 1998; Nelson, Hammen, Daley, Burge & Davila, 2001; Segrin & Abramson, 1994)。Dykman (1998)は、証明目標の高い者は、対人関係で自己価値を保証してくれるよう他者に強く求める「保証を求める行動(reassurance-seeking behavior)」を行うことによって、他者からの拒絶を誘発し、その結果抑うつに陥るかもしれない、と論じている。

本研究では、Dykman (1998)の主張に基づき、目標志向性が抑うつに影響を与えるメカニズムとして、素因ストレスモデルとストレス誘発モデルを取り上げ、これを縦断的に検討する。

ところで、近年、ポジティブ心理学(positive psychology)という観点から、精神的不健康を予測・治療することを目的とした研究だけでなく、精神的不健康を予防したり精神的健康を予測する研究の重要性が指摘されている(Seligman & Csikszentmihalyi, 2000)。精神的健康を予測する研究においては、例えば、自分の将来について楽観的な見方ができる者(Peterson, 2000)や、自己・自分の将来・環境をポジティブに偏って知覚している者(Taylor & Brown, 1988; 外山・桜井, 2000)は、精神的に健康である(精神的に不健康でない)、といった結果が見出されている。また、近年のストレス研究から、ポジティブな出来事(ユーストレス)が抑うつつの発生を阻止するという結果が報告されている(高比良, 1998; 外山・桜井, 1999)。

これらの研究から、精神的健康を維持している(ないしは、精神的に不健康な状態に陥らない)者は、自身の精神的健康を自ら(意図的にも無意図的にも)積極的に維持するように振舞っている可能性

が考えられる。例えば、精神的に健康で抑うつに陥りにくい者は、対人関係において、他者からポジティブな反応を誘い起こすような対人的振る舞いをすることによって、あるいは、対人関係において直面した様々な出来事をポジティブに解釈することによって、精神的健康を維持したり、抑うつに陥りにくくなっている可能性が考えられる。

以上の研究とその考察、及び、Hammen (1991) のストレス誘発モデルを踏まえて、本研究では、目標志向性と抑うつとの関係に介在するもう1つのメカニズムとして、新たに「目標志向性→ポジティブな対人出来事（ユーストレス）の誘発ないし非誘発→非抑うつないし抑うつ」というプロセスを仮定し、この仮説も縦断的に検討する（この仮説を、ストレス誘発モデルに対応させて「ユーストレス誘発モデル」と呼ぶ）。

本研究の目的をまとめると以下ようになる。本研究においては、目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズムを、a) 素因ストレスモデル、b) ストレス誘発モデル、c) ユーストレス誘発モデルの3つの仮説から検討する。3つの目標と抑うつとの関係についての黒田・桜井 (2001) の結果に基づく、以下のような予測が成り立つであろう。

〔経験・成長目標と抑うつとの負の関係について〕

高い経験・成長目標は、a) 友人関係におけるストレスが生じた時その衝撃を和らげる（素因ストレスモデル）、ないしは、b) そもそもストレスの生じる頻度を低くする（ストレス誘発モデル）、そして、c) ユーストレスの生じる頻度を高くする（ユーストレス誘発モデル）、ことによって抑うつを低めているであろう。

〔評価一接近目標と抑うつとの負の関係について〕

高い評価一接近目標は、a) ストレスが生じた時その衝撃を和らげる、ないしは、b) ストレスそのものの生じる頻度を低くする、そして、c) ユーストレスの生じる頻度を高くする、ことによって抑うつを低めているであろう。

〔評価一回避目標と抑うつとの正の関係について〕

高い評価一回避目標は、a) ストレスが生じた時その衝撃を増幅する、b) ストレスそのものの生じる頻度を高める、c) ユーストレスの生じる頻度を低める、ことによって抑うつを高めるであろう。

## 方 法

### 被調査者

栃木県内の公立中学校の1年生117名（男子52名、女子65名；第2回目調査では全て2年生に進級して

いた）。

### 質問紙

**目標志向性尺度**：黒田・桜井 (2001) により作成された、経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標を測定する尺度を用いた。各目標は、順に、10項目、7項目、8項目で構成されている。評定は「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの4段階で求めた。

**友人関係におけるストレス（ネガティブな出来事）・ユーストレス（ポジティブな出来事）尺度**：高比良 (1998) により作成されたライフイベント尺度の下位尺度である対人ライフイベント尺度の短縮版の項目を、友人関係における出来事に修正して用いた。出来事の発生頻度としては、最近3か月間に起こった頻度を、「ぜんぜんなかった」(0点)、「たまたまあった」(1点)、「時々あった」(2点)、「よくあった」(3点)の4件法で尋ねた。なお、恋愛関係に関するポジティブな出来事（高比良 (1998) における項目番号11）は友人関係における出来事に修正できないため、また、ネガティブな出来事の項目番号10は友人関係における出来事に修正すると、項目番号12と重複するため、削除した。従って、合計28項目を友人関係におけるストレス・ユーストレス尺度として用いた。

**抑うつ尺度**：桜井 (1987) によって作成された子ども用抑うつ尺度から、項目一全体相関の高い13項目を用いた。用いた項目は、黒田・桜井 (2001) と同じである。被調査者は、抑うつを表す1組3つの文章（例えば、「悲しいときもあった」「何回も悲しかった」「いつも悲しかった」）の中から、2週間くらい前から今日までの間で、自分に最もあてはまるものを1つ選び、○をつけるようになっている。問ごとの抑うつ得点は、3つの文章の中で最も抑うつ程度の低いものが1点、次が2点、抑うつ程度の最も高いものが3点とされた。

### 手続き

第1回目の調査 (1999年11月に実施；以下、Time 1と略記) において目標志向性尺度と抑うつ尺度を実施し、1年1ヶ月後の第2回目調査 (2000年12月に実施；以下、Time 2と略記) において、ストレス・ユーストレス尺度と抑うつ尺度を実施した。

## 結 果

各尺度の平均値、標準偏差、そして尺度間の相関はTable 1に示されている。以下、①素因ストレスモデル、②ストレス誘発モデルおよびユーストレス

Table 1 各尺度の平均値 ( $M$ ) および標準偏差 ( $SD$ ) と尺度間の相関係数

	$M$	$SD$	経験・成長 目標	評価-接近 目標	評価-回避 目標	ストレス	ユースト レス	Time 1 抑うつ	Time 2 抑うつ
経験・成長目標	29.58	4.75	—	.42**	.50**	.18 <sup>+</sup>	.31**	-.07	-.07
評価-接近目標	19.22	4.22		—	.60**	.10	.19*	-.12	-.01
評価-回避目標	19.60	4.19			—	.25**	.05	.13	.21*
ストレス	10.09	6.34				—	.33**	.28**	.49**
ユーストレス	21.50	6.50					—	-.14	-.18*
Time 1 抑うつ	17.19	3.63						—	.55**
Time 2 抑うつ	17.64	3.87							—

<sup>+</sup> $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .  $N = 117$ .

誘発モデルの順に検討する。

### 1. 素因ストレスモデルの検討

目標志向性を抑うつの素因とした素因ストレスモデルを検討するために、坂本 (1997) や高比良 (2000) に従い、Time 1 の抑うつ得点を共変量とし、Time 2 の抑うつ得点を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。なお、分析にあたっては、多重共線性の問題を避けるため、3つの目標およびストレスの得点はそれぞれ標準得点を用いた。

分析の手続きは次の通りである。まず第1ステップで、Time 1 の抑うつ得点を共変量として回帰式に投入した。第2ステップで、独立変数である3つの目標 (経験・成長目標、評価-接近目標、評価-回避目標) とストレスを同時に投入した。第3ステップで、3つの目標とストレスの交互作用 (各目標の得点とストレス得点をそれぞれ掛け合わせたもの) を回帰式に投入した。以上の手続きによって、

目標志向性、ストレス、目標志向性とストレスの交互作用が、Time 1 の抑うつ得点から Time 2 の抑うつ得点への変化をどの程度予測するかを検討できる。

結果はTable 2に示されている。分析の結果、第1ステップと第2ステップの効果が有意であった (順に、 $R^2$ 変化量 = .30,  $p < .01$ ;  $R^2$ 変化量 = .15,  $p < .01$ )。第2ステップについて詳しく検討すると、経験・成長目標とストレスからのパスが有意であり (順に、 $\beta = -.18$ ,  $p < .05$ ;  $\beta = .36$ ,  $p < .01$ )、評価-回避目標からのパスが有意傾向であった ( $\beta = .17$ ,  $p < .10$ )。さらに、第3ステップの交互作用効果が有意であった ( $R^2$ 変化量 = .07,  $p < .01$ )。第3ステップを詳しく検討すると、経験・成長目標とストレスの交互作用、および評価-回避目標とストレスの交互作用が有意であった (順に、 $\beta = -.22$ ,  $p < .05$ ;  $\beta = .40$ ,  $p < .01$ )。

交互作用が有意であったため、その方向性を以下

Table 2 階層的重回帰分析の結果

投入順序	投入した変数	$R^2$ の変化	$F$ 値の変化	$\beta$	$\beta$ の有意性 検定 ( $t$ 値)
1	Time 1 抑うつ	.30**	49.47**	.55	7.03**
2	主効果	.15**	7.34**		
	経験・成長目標			-.18	-2.10*
	評価-接近目標			-.03	-.32
	評価-回避目標			.17	1.77*
	ストレス			.36	4.75**
3	交互作用	.07**	5.38**		
	経験・成長目標×ストレス			-.22	-2.46*
	評価-接近目標×ストレス			-.09	-.91
	評価-回避目標×ストレス			.40	3.71**

<sup>+</sup> $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .  $N = 117$ .

従属変数は、Time 2 の抑うつである。

の手続きによって検討した。まず、経験・成長目標とストレスの交互作用の方向性については、Time 2の抑うつ得点を予測する回帰方程式の中に、Time 1の抑うつ得点の平均値、評価一接近目標得点と評価一回避目標得点の平均値（すなわち、0）、および、経験・成長目標得点の平均値±1標準偏差、ストレス得点の平均値±1標準偏差を代入することによって、経験・成長目標（高）/ストレス（高）群、経験・成長目標（高）/ストレス（低）群、経験・成長目標（低）/ストレス（高）群、経験・成長目標（低）/ストレス（低）群の4つの群における抑うつ得点の変化量を算出した。結果はFig. 1に示されている。

結果から、経験・成長目標の低い者においては、ストレスが多くなると、抑うつが高くなることが示された。一方、経験・成長目標の高い者においては、ストレスの高低は抑うつの高低にほとんど影響を与えないことが示された。

次に、評価一回避目標とストレスの交互作用の方向性を検討する。Time 2の抑うつ得点を予測する回帰方程式の中に、Time 1の抑うつ得点の平均値、経験・成長目標得点及び評価一接近目標得点の平均値（0）、評価一回避目標得点の平均値±1標準偏差、ストレス得点の平均値±1標準偏差を代入することにより、評価一回避目標（高）/ストレス（高）群、評価一回避目標（高）/ストレス（低）群、評価一回避目標（低）/ストレス（高）群、評価一回避目標（低）/ストレス（低）群の4つの群における抑うつ得点の変化量を算出した。結果はFig. 2に示されている。

結果から、評価一回避目標の高い者においては、ストレスが多くなると、抑うつが高くなることが示された。一方、評価一回避目標の低い者においては、ストレスの高低は抑うつの高低にほとんど影響を与えないことが示された。

なお、評価一接近目標とストレスの交互作用に関

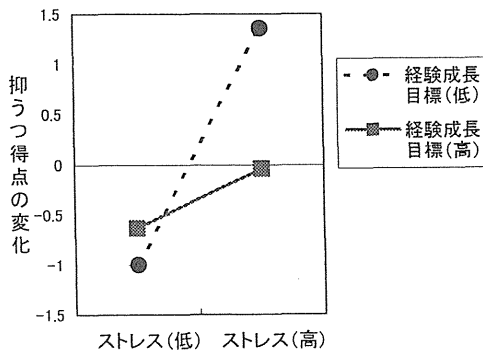


Fig. 1 経験・成長目標×ストレスの階層的重回帰分析の結果

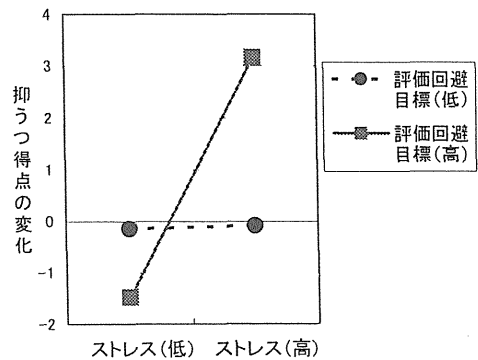


Fig. 2 評価一回避目標×ストレスの階層的重回帰分析の結果

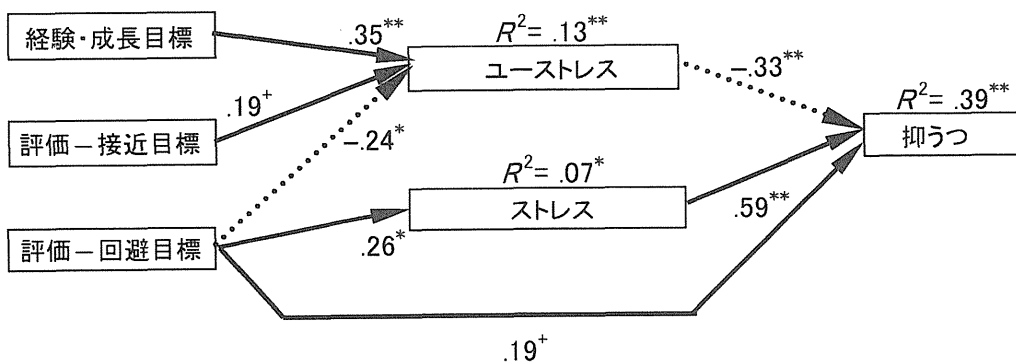


Fig. 3 「目標志向性→ユーストレスおよびストレス→抑うつ」の重回帰分析の結果  
注) 図中の数値は、標準偏回帰係数である。

+ $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .

しては、有意な結果が示されなかった。

## 2. ストレス誘発モデルおよびユーストレス誘発モデルの検討

次に、ストレス誘発モデルとユーストレス誘発モデルを検討するために、「目標志向性→ストレスの頻度およびユーストレスの頻度→抑うつ」という流れを重回帰分析により検討した。結果を Fig. 3に示す。

まず、「目標志向性→ストレス」について重回帰分析を行ったところ、重回帰式は有意になった ( $F(3, 113) = 2.86, p < .05, R^2 = .07$ )。結果から、評価-回避目標からストレスへの正のパス ( $\beta = .26, p < .05$ ) が示された。経験・成長目標および評価-接近目標からの負のパスは示されなかった。

次に、「目標志向性→ユーストレス」について重回帰分析を行った。その結果、重回帰式は有意になった ( $F(3, 113) = 5.79, p < .01, R^2 = .13$ )。3つの目標からユーストレスへのパスを検討してみると、経験・成長目標から有意な正のパス ( $\beta = .35, p < .01$ )、評価-回避目標から有意な負のパス ( $\beta = -.24, p < .05$ ) が示された。また、評価-接近目標から正のパス ( $\beta = .19$ ) が示されたが、有意傾向 ( $p < .09$ ) であった。しかし、1年後という期間や被験者数を考えれば、 $\beta = .19$  というパス係数は決して小さくない値であると考えられる。

最後に、「目標志向性・ストレス・ユーストレス→抑うつ」について重回帰分析を行ったところ、重回帰式は有意となった ( $F(5, 111) = 14.15, p < .01, R^2 = .39$ )。抑うつに対しては、ストレスから有意な正のパス ( $\beta = .59, p < .01$ )、ユーストレスからは有意な負のパス ( $\beta = -.33, p < .01$ ) が示された。また、評価-回避目標からの有意傾向の正のパス ( $\beta = .19, p < .10$ ) も示された。

## 考 察

本研究は、友人関係場面における3つの目標が抑うつに影響を与えるメカニズムについて、素因ストレスモデル、ストレス誘発モデル、ユーストレス誘発モデルの3つの仮説から検討することを目的として行われた。

結果から、黒田・桜井(2001)において見出された3つの目標と抑うつとの関係は、以下のように説明できる。まず、経験・成長目標と抑うつとの負の関係については、高い経験・成長目標は、ストレス(友人関係におけるネガティブな出来事)に遭遇した時に、そのネガティブな影響を和らげることに

よって(素因ストレスモデル)、あるいは、ユーストレス(友人関係におけるポジティブな出来事)の生じる頻度を高めることによって(ユーストレス誘発モデル)、抑うつを発生を防いでいることが示唆される。次に、評価-接近目標と抑うつとの負の関係については、高い評価-接近目標がユーストレスの生じる頻度を高めることによって(ユーストレス誘発モデル)、抑うつを低めていることが示唆される。最後に、評価-回避目標と抑うつとの正の関係については、高い評価-回避目標がストレスの生じる頻度を高め(ストレス誘発モデル)、その発生したストレスから抑うつを増長させていること(素因ストレスモデル)、あるいは、ユーストレスの生じる頻度を低めることによって抑うつを高めていること(ユーストレス誘発モデル)、が示唆される。これらの結果は、1年間という長期にわたっても、目標志向性がストレスおよびユーストレスや抑うつとの発生・非発生に貢献するというを示唆するものでもある。

高い経験・成長目標がストレスのネガティブな影響を和らげるという結果に関して、何故、高い経験・成長目標はストレスの影響を緩和するのであろうか。この点に関しては、経験・成長目標の高い者は、ネガティブな出来事が生じた時には「これも1つの良い経験だ」といったポジティブな認知をするために、抑うつを発生を防いでいるのであろうと考えられる。

また、高い経験・成長目標や評価-接近目標をもつと、友人関係の中で良い関係を築く行動や親切的行動が生じやすくなると予想されるが、その結果として、友人からのポジティブな反応を受けやすくなり、抑うつが低くなるのであろうと考えられる。本研究の結果からは、Dykman(1998)が論じているように、他者からのネガティブな反応が生じにくくなることにより抑うつを発生を防いでいるのではない、ということが示唆される。

「経験・成長目標および評価-接近目標→ユーストレスの発生→抑うつ」という結果は、以下のことも示唆している。すなわち、経験・成長目標や評価-接近目標の高い者は対人関係において経験の獲得や性格についての良い評価の獲得という目標の達成を目指しているが、その目標を達成しようとすることは、結果的に(無意図的に)、友人からのポジティブな反応を引き出すことを通して、自身の精神的健康を維持することにつながっているということを示唆している。逆にいえば、精神的健康を自ら積極的に維持していくためには、対人関係における経験の獲得および自己の成長を目指したり、良い評

価の獲得を目指すことが重要になるということを本研究は示唆している。このように、精神的に健康である者は、他者からのポジティブな反応を誘発することによって自ら精神的健康を維持している、という見解は、従来のポジティブ心理学の研究においてはあまりみられず、重要な発見であると思われる。

ところで、評価-接近目標の高い者は、ストレスが生じた時には（運の悪さや相手の性格のまずさなどの外的な要因に原因を帰属するため）抑うつに陥りにくくなるであろうと予想されたが、この予測は支持されなかった（ただし、評価-回避目標のようにストレス時に抑うつを増長するという結果も示されなかった）。また、高い評価-接近目標は、ストレスの生じる頻度を高めてはいないが低めているわけでもないことが示された。黒田・桜井（2001）においては、評価-接近目標が抑うつと負の関係にあるという結果が見出されたが、本研究の結果からは、高い評価-接近目標はいつでも適応的な機能を果たしているわけではなく、対人関係において他者からのポジティブな反応を引き出す限りにおいて適応的な役割を果たす、ということができよう。この点についてはさらなる研究が必要である。

評価-回避目標と抑うつとの関係に介在するメカニズムに関しては、本研究で検討された3つのメカニズムから説明できる。評価-回避目標が高いと、友人関係の中で積極的な行動をとることができなくなり、ポジティブな出来事の生じる頻度を低めたり、ネガティブな出来事の生じる頻度を高めたりするのであろう。そして、自ら誘発したネガティブな出来事の原因を、「自分の性格が悪いからだ」と解釈することによって、抑うつ状態を強めているのであろうと考えられる。

以上のように、本研究から、3つの目標と抑うつとの関係に介在するメカニズムはかなり明らかにされた。また、新たな発見もあった。しかしながら同時に、いくつかの問題点と課題も残された。

まず、本研究においては、何故経験・成長目標や評価-接近目標がポジティブな出来事に遭遇する頻度を高め、評価-回避目標はそれを低めるか、そして、何故評価-回避目標はネガティブな出来事に遭遇する頻度を高めるか、については検討されておらず、これらの関係について十分な説明がなされていない。この点に関しては、それぞれの目標が友人関係においてどのような認知・感情・行動をもたらすかを検討することによって、十分な説明ができるようになるであろう。すなわち、各々の目標の高い者がそれぞれどのような対人的振る舞いをするによって他者からのポジティブな反応やネガティブな

反応を引き出しているか、あるいは、友人関係においてどのような期待や認知的枠組みをもたらすことによってポジティブな出来事やネガティブな出来事への知覚的感受性を高めているか、などといった観点からの研究が必要であろう。例えば、評価-接近目標の高い者は、友人に対して親切に振る舞う傾向が強くなり、その結果友人から好意的な反応を得ている可能性が考えられる。あるいは、評価-接近目標が高いと、友人からの良い評価や好意的な反応に注意が向きやすくなるため、ポジティブな出来事への知覚的感受性が高まる可能性も考えられる。

最後に、本研究においては、被験者数が少なく、さらに対象学年も中学1年生のみであった。今後は、対象者数と対象年齢を広げて本研究の追試をすることにより、結果の一般化を目指す必要がある。

### 引用文献

- Davila, J., Hammen, C., Burge, D., Paley, B. & Daley, S. E. 1995 Poor interpersonal problem solving as a mechanism of stress generation in depression among adolescent women. *Journal of Abnormal Psychology*, 104, 592-600.
- Dweck, C.S. 1996 Capturing the dynamic nature of personality. *Journal of Research in Personality*, 30, 348-362.
- Dweck, C.S. & Leggett, E.L. 1988 A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, 95, 256-273.
- Dykman, B.M. 1998 Integrating cognitive and motivational factors in depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 139-158.
- Hammen, C. 1991 Generation of stress in the course of unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 555-561.
- Herzberg D.S, Hammen, C., Burge, D., Daley, S. E., Davila, J. & Lindberg, N. 1998 Social competence as a predictor of chronic interpersonal stress. *Personal Relationships*, 5, 207-218.
- 黒田祐二・桜井茂男 2001 子どもの抑うつ研究の概観 筑波大学心理学研究, 23, 129-138.
- 黒田祐二・桜井茂男 2001 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係 教育心理学研究, 49, 129-136.
- 村田 豊 1993 小児期のうつ病 臨床精神医学, 22, 557-563.
- Nelson, D.R., Hammen, C., Daley, S.E., Burge, D. & Davila, J. 2001 Sociotropic and autonomous

- personality styles: Contributions to chronic life stress. *Cognitive Therapy and Research*, 25, 61-76.
- Peterson, C. 2000 The future of optimism. *American Psychologist*, 55, 44-55.
- 坂本真士 1997 自己注目と抑うつ of 社会心理学 東京大学出版会
- 桜井茂男 1987 児童の絶望感及び抑うつに及ぼす原因帰属の影響 日本相談学会第20回大会発表論文集, 72-73.
- 桜井茂男 1995 「無気力」の教育社会心理学—無気力が発生するメカニズムを探る— 風間書房
- Segrin, C. & Abramson, L. Y. 1994 Negative reactions to depressive behaviors: A communication theories analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 655-668.
- Seligman, M.E. P. & Csikszentmihalyi, M. 2000 Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, 55, 5-14.
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.
- 高比良美詠子 2000 抑うつ of ホープレスネス理論における領域一致仮説の検討 心理学研究, 71, 197-204.
- 高野清純 1995 感情の発達と障害 福村出版
- Taylor, S.E. & Brown, J.D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 116, 21-27.
- 外山美樹・桜井茂男 1999 大学生における日常的出来事と健康状態の関係—ポジティブな日常的出来事の影響を中心に— 教育心理学研究, 47, 374-382.
- 外山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, 48, 454-461.
- 辻井正次・幸 順子・本城秀次 1990 児童・思春期の抑うつ状態に関する研究—健常児童を対象として— 名古屋大学教育心理学紀要, 37, 129-139
- 2001. 9. 28 受稿 —